

# 家事の外部化

## —サービス利用の規定要因と家事頻度との関連—

平尾 桂子

(上智大学大学院 地球環境学研究科)

### 【要旨】

この半世紀、日本の家事労働の現場で起きた最も大きな変化とは、男性の家事参加が進んだことではなく女性の“家事退出”である。女性の家事時間の減少は、彼女達の労働供給の増加とともに、家事の外部化傾向によって説明されてきた。しかし、家事の外部化傾向と、女性の家事時間の減少、および女性の労働供給の三要素の関係を直接検証した研究は少ない。本研究では、NFRJ18で新たに設けられた家事外部化に関する設問である1)衣類のクリーニング、2)清掃サービスの利用、3)食の外部化(平日の夕食を誰も調理しないこと)を用いて、それらのサービスを利用する世帯の属性を特定するとともに、夫と妻の家事頻度に対する家事外部化の効果を検証した。分析の結果、クリーニングや清掃サービスの利用は、共働き世帯であることや妻の労働供給とはさほど関連が見られず、また妻の洗濯や掃除の頻度にも影響がみられず、これらの家事を代替するものではないことが明らかになった。しかし、市販の弁当や惣菜の利用といった食の外部化は「食」に関する妻の家事負担を軽減する効果が認められた。その一方で、こうした食の外部化は夫が食事を用意する頻度を上げるという一見矛盾する結果も確認された。これは男性と女性の間で「食事の用意」と「調理」に対する解釈が異なるためだと推測される。日本人の家事時間は世界的に見て極めて短いことが知られており、「女性の活躍推進」のために家事外部化を進めるべきだという政策は家事と仕事をめぐる家族の現実を誤認していると考えられる。

**キーワード:** 家事外部化、家事頻度、クリーニング、清掃サービス、食の外部化

## 1. 問題の所在

支払われない労働である「家事」を誰がどの程度行うかという問題は、ジェンダー研究の中心的課題であった。それは、経済活動や政治参画のジェンダー格差が、家事やケア労働のジェンダー格差と表裏一体の関係にあるからに他ならない。

家事労働（無償労働）に関する研究は、夫婦間で誰が何をどの程度担い、その分担割合は何によって規定されるのかという問いを中心に展開されてきた（Shelton and John 1996; Hook 2006）。家事頻度や家事に費やす時間を計測し、その総量に対する夫と妻の貢献度の違い（時間差や夫婦間比率）を被説明変数とし、収入（夫婦間の差）・時間制約（労働時間や通勤時間）・性別役割意識などを説明変数とするモデルが主流であった。こうした研究枠組みで前提としてきたのは、夫と妻が行う家事が家族の家事総量であるとする、ある種の「閉じたシステム」である。

先進諸国では男性の家事時間は一定の増加傾向が報告されている(Hook 2006)が、それ以上に顕著なのは女性の（育児を除く）家事時間の大幅な減少である(Bianchi and Milkie 2000)。夫の家事分担比率に上昇が見られる場合でも、その比率の変化は夫の家事時間の増加によってではなく、妻の家事時間の減少によってもたらされてきた(Hirao 2019)。つまりここ半世紀で家事労働の現場で起きた変化とは、男性の家事参加が進んだことではなく、女性の“家事退出”なのである。

妻の家事時間の減少は、もちろん彼女たちの労働供給が増加したと無関係ではない。夫婦の労働時間が長くなれば家事時間は減少し、その傾向は特に妻で顕著である（松田・鈴木 2001）。それと同時に、妻の家事時間の短縮化は、家事の外部化傾向によって説明されてきた(De Ruijter 2004)。

我が国でも、消費支出に占める家事関連項目（調理済み食品や家事代行サービスなどへの支出）の割合には一定の増加傾向が見られる。たとえば、勤労者世帯の消費支出における家事関連項目の支出割合は1985年の6.7%から2014年には9.1%に増加し、食事に関する支出だけでも一般外食は1985年から2014年で1.3倍、調理食品への支出は1.8倍に増加している（永井 2016）。

もちろん、無償労働としての家事は外部サービス市場の動向と無関係ではない。顕著な例が「裁縫」だろう。かつて「お針仕事」と呼ばれ、女性が身につけねばならない素養の一つとされた。それは和服の管理が、着物をほどこき、洗い張りして乾かしたものを仕立て直し、ほころびたところがあれば繕うという作業とセットだったからに他ならない。第二次世界大戦後、ライフスタイルが和装から洋装へ変化するとともに、既製服市場が発展し、衣類は商品化され、裁縫も家事の項目から姿を消した（品田 2007）。

このように、家事システムは家庭内で閉じているのではなく、市場システムと連動していると考えるのが妥当であろう。しかし、家事がどの程度外部化されているか、そしてそ

の傾向は夫婦の家事分担とどのような関係にあるかという問いは正面から検証されてこなかった。

その理由の一つには、家事外部化に関する研究が家計経済やマーケットリサーチの分野で発展し、夫婦間の家事分担は主に家族社会学で研究されてきたという学術分野における分断があると思われる。

家事の外部化の計測は、主に家計経済学でなされてきた。たとえば、家計調査で見ると、炊事、洗濯、掃除、など家事行動に対応する一般外食、調理食品、洗濯代、家事代行業など「家事に関する支出」が消費支出に占める割合はここ数十年で上昇し、その傾向は主に共働き世帯で進行していることから、女性の就業増加とともに家事の外部化は進むと予測されている（永井 2016）。こうした議論でよく用いられるのが、家計消費における家事の外部化傾向と、時間調査で観測される女性の家事時間の短縮が同時進行していることである。しかし、家事の外部化傾向と家事時間の短縮を同じデータセットで直接検証しているものではない。つまり、家事サービスの利用実態や調理済み商品の購入に関する調査においては、そのような商品やサービスの購入によって実際にどの程度の家事負担が、特に女性のそれが軽減したかは計測されていないのである。

その一方で、家族社会学における家事研究、特に夫婦間の家事分担をめぐる議論では、家事に費やす時間量や家事を遂行する頻度に注目してきた。たとえば、基幹統計調査の一つであり生活時間の国際比較で使われる「社会生活基本調査」では、睡眠や身の回りの用事、通勤・通学などとともに家事時間も調査され、女性の、特に共働き世帯の妻の家事時間がここ数十年で減少し、女性の家事時間は 1976 年には一日平均 198 分だったのが 2016 年には 151 分へと 31 分も減少している<sup>1</sup>。しかし、この減少が家事の外部化によるものか、あるいは家電製品の発達により家事が効率化されたためなのかは直接検証されていない。「社会生活基本調査」では家事負担を軽減する商品やサービスの購買動向が調査されていないからである。

さらに、女性の労働参加を推進するためには家事の外部化が必要だという議論がしばしばなされてきた。たとえば、第二次安倍政権下での 2014 年 6 月に閣議決定された『日本再興戦略』では、「女性が輝く社会」を実現するための方策の一つとして、安価で安心な家事支援サービスを利活用できる環境整備を図ることが掲げられ、国家戦略特区において、外国人家事支援人材の受け入れを可能とすることが提唱されている（内閣府 2014）。女性の労働供給を増加するためには、女性の家事負担を軽減する必要がある、その方法として家事支援サービスの利用を含む家事の外部化が有効である、という考え方がある。つまり、家事の外部化は家事時間の短縮を通じて女性の労働供給を高める効果があるという想定がなされているのである。

こうした想定がなりたつためには、家事の外部化が家事時間を短縮させ、家事時間が短い女性は労働供給が高いというエビデンスが必要だ。確かに、「社会生活基本調査」を見

---

<sup>1</sup> 平日・休日合わせた週全体の総平均時間（総務省統計局 2017）

る限り、共働き世帯の妻の家事時間は3時間16分、専業主婦は4時間35分と専業主婦の方が長く（総務省統計局 2017）、夫婦とも労働時間が長くなるほど家事時間は短くなり、その傾向は妻で顕著である（松田・鈴木 2001）。そして、家事サービスをより多く消費しているのは共働き世帯である（永井 2016）。これらから、1) 女性の家事時間の減少は2) 彼女達の労働供給が増えたからであり、3) 働く女性の家事を代替するために家事外部化が進んでいると推測されてきた。だが、これら三つの要素の関連は、直接検証されてきたとは言いがたい。また、家電製品の高機能化による家事の効率化効果の影響も無視されてきた。

それどころか、2) の女性の労働供給も「社会生活基本調査」で捕捉される労働時間で見る限り、家事時間の減少と同時進行するかのように減少しているのである。たとえば、有業者の女性が仕事に費やす時間は、1976年の一日平均345分から2016年には287分へと58分も減少している。「毎月勤労統計調査」でも同様の傾向が見られ、労働時間の減少はパート労働者比率が高まったことが要因と見なされている（内閣府 2020）。つまり、家事時間の減少は労働時間の増加によって引き起こされたとは言いがたい。そもそも、家事時間の短縮が家事外部化によるものなのか、言い換えると、家事外部化が家事時間を短縮する効果があるのかは直接検証されてはいないのである。

この度、第4回全国家族調査（NFRJ18）にて、従来調査されてきた回答者と配偶者の家事遂行頻度に加え、洗濯、掃除、炊事を代替すると家事サービス利用の頻度（衣類のクリーニング、住居の清掃サービス、平日の夕食を誰も調理しないこと）を問う項目（問32）が設けられた。本論ではそれらのサービスを利用する人の属性を特定するとともに、それぞれのサービスの利用が実際に家事を代替しているのかという問題について検討する。

## 2. 先行研究

本研究で対象とする家事の外部化サービス、（クリーニング、清掃サービス、平日の夕食を誰も調理しないこと）のうち、「家計調査」等の政府統計で最も実態が捕捉されているのは3番目の夕食に代表される「食」の「外部化」だろう。「食の外部化」とは、レストラン等に出かけて食事をする「外食」と、家庭内で調理して食べる「内食」の中間にある市販の弁当や惣菜類、そのまま調理せずに食べられる加工食品などの利用を「中食（なかしょく）」とし、食料消費うち「中食」や「外食」利用が増加することと定義されている（農林水産省 2015 農業・食品産業技術総合研究機構 2006）。すなわち、家庭における食生活から「調理」を差し引いた部分が増加することが「食の外部化」として考えてよい。

「家計調査」等から見た「食の外部化率」は近年増加傾向にある。「家計調査年報」に報告される調理済み食品の費用が飲食費に占める割合は1970年の3.6%から2005年の11.9%へと上昇し、調理食品への支出と外食費の合計の割合は12.5%から28.8%へと上昇している（長谷部・草刈 2007）。調査方法は異なるが、日本フードサービス協会の調査

によれば、家計の飲食料費に占める外出+惣菜・料理小売品費の割合は1975年の28.4%から2009年には実に42.6%に増加している（日本フードサービス協会 2009）。こうした変化の背景には「家事をまったくしない女性の増加」（長谷部 草刈 2007; p.38）という人々（特に女性）の〈行動変容〉とともに、単身世帯や共働き世帯の増加や世帯規模の縮小といった〈構造的変化〉が指摘されてきた（農研機構 2020）。

冒頭で述べたように、1) 家事（特に食）の外部化傾向と、2) （特に女性の）家事時間の減少、3) 女性の労働力率上昇といった三つの変化は趨勢として同時進行しているが、それらの関連について日本のデータを用いて直接検証を試みた研究はそれほど多くない。

「消費生活に関するパネル調査」のパネル5（1997年実施）とパネル6（1998年実施）を用いて、妻の就労と家庭で食べるテイクアウト・弁当、調理済み惣菜、外出の利用回数の関連を分析した湯浅（2005）は、妻が働くことにより家事が外部化されている可能性を示唆している。ただし、分析結果を精査すると、妻の収入の増加は妻が常勤の世帯でテイクアウト・弁当利用の回数の増加をもたらしているにとどまっており、その関連は非正規雇用では有意に達していない。また、惣菜利用の回数や外出回数との関連でも妻の収入増加の効果は常勤・パート/アルバイト/妻無職の世帯のいずれでも5%水準では有意に達していない（湯浅 2005： 343-345）。

家事外部化に関する海外の研究では、時間調査を使用したものが多いが、家事外部化が妻の家事時間におよぼす効果は報告される限り一定ではない。1995年に実施された Dutch National Time Budget Survey を用いた Van der Lippe, Tijdens と Ruijter (2004)では、家事使用人の利用と皿洗い機の導入は妻の家事時間を、電子レンジは夫の家事時間を減らす効果があると報告されている。オーストラリアのパネルデータで固定効果モデルによる推定を行った Craig と Baxter も家事代行サービスの定期的利用が夫と妻の家事ジェンダーギャップを縮小すると報告するとしている(Craig and Baxter 2016)。

一方、2015年の German Socio-Economic Panel Innovation Study を用いた Shire, Schnell, Noack (2017)によれば、清掃サービスを利用しているのはもともと裕福な家庭であり、妻の収入など夫婦間の相対的資源と家事の外部化の程度にはさほど関連は見られないとしている。また、アメリカの中高年層を対象とした調査を用いた Killward (2011)は、掃除や料理の外部化（外出費と清掃サービスの利用）は、妻が調理や掃除に費やす時間を必ずしも減少させるわけではないと報告している。

こうした結果の不整合は、「家事の外部化」（outsourcing）の計測方法の多様性にも起因すると思われる。一言で「家事の外部化」といっても、家事使用人の利用なのか、清掃サービスの利用なのか、あるいは家電製品の利用、テイクアウト食品の利用など、様々な場面が想定される。

また、こうした海外の研究では家事外部化の文脈が日本のそれとは大きく異なっていることにも注意する必要がある。たとえば、オランダのケースで見ると、家事使用人を雇う世帯の割合は1980年の6.3%から2000年には12.3%に上昇し（De Ruijter 2004）、共働き世

帯に限れば実に 25%の世帯が家事使用人をなんらかの形で雇っているという (Van der Lippe, Tijdens, and De Ruijter 2004)。いずれにしても、日本とは比較にならないほど共働き世帯を支える家事代行サービス（特に清掃サービス）が普及していることがうかがえる。International Social Survey Program を用いて清掃ヘルパーの利用の国際比較を行った Estévez-Abe (2015) では、個人レベルでは学歴が高く労働時間が長い人、子どもの数が多い方が清掃ヘルパーを利用しているが、国単位で見ると、非熟練移民の割合や国内の経済格差が大きい国で清掃ヘルパーの利用率が高いことが明らかされている。

これらの議論を踏まえ、本研究では、以下の二つの分析課題を設定する。

第一に NFRJ18 の家事の外部化設問を用いて、これらのサービスを利用する世帯の属性を特定する。第二に、家事外部化サービスの利用と夫と妻それぞれの家事遂行頻度の関係を検証する。誰が家事外部化サービスを利用しているのか、外部化サービスの利用は家事遂行頻度を下げる効果があるのか、あるとすれば誰の家事頻度を下げているのか。以下、使用したデータ、変数について述べる。

なお、上述の通り、特に食の外部化で顕著にみられる傾向の背景には女性の家事時間の減少という（個人レベルの）行動変容と、単身世帯や共働き世帯の増加と世帯人数の縮小という（社会レベルの）構造変容という二つの異なった変化が同時に作用していると考えられるが、本研究では、家事外部化の決定単位を「世帯」であると考え、分析の対象を有配偶かつ二人以上の世帯に限定する。

### 3. データと変数

#### 3.1 データ

データは第4回全国家族調査 (NFRJ18) を使用し、有配偶者かつ同居する夫婦のデータを抽出して用いた。

#### 3.2 変数と分析手法

分析に用いた変数は下記のように定義した。

##### 課題1 家事外部化サービス利用の規定要因

被説明変数は、問 32 の (ア) 衣類をクリーニングに出すこと、(イ) 住居の清掃サービスを利用すること、(ウ) 平日の夕食を家族の誰も調理しないそれぞれについて、(1) 「よくある」を 4、(2) 「時々ある」を 3、(3) 「ほとんどない」を 2、(4) 「まったくない」を 1 とする尺度を作成し、以下の説明変数を用いて順序ロジスティック回帰分析を行った。

まず、回答者と配偶者の属性と性別の組み合わせで夫と妻を特定し、それぞれの学歴、年齢層を特定した。さらに、それぞれの仕事の有無を用いて「働き方世帯類型」として

1) 夫片働き、2) 妻片働き、3) 共働き、4) 両方無職のカテゴリー変数を作成した<sup>2</sup> (夫片働きが基準カテゴリー)。時間需要を代替するものとして、それぞれの労働時間から、妻の方が夫よりも労働時間が長いケースを「妻の労働時間が夫よりも長い」とするダミー変数を作成した。家事需要を代替するものとして、回答者の6人目までの子どもの年齢を用いて「6歳児未満の子どもあり」とするダミー変数を用いた。階層変数の代替として家計の状態(問34)で「かなりゆとりがある」と「どちらかといえばゆとりがある」を1とし、「暮らしぶり余裕有り」とするダミー変数として用いた<sup>3</sup>。ライフステージの代替変数として夫の年齢層を投入した。

#### 課題2 夫と妻の家事遂行頻度に対する家事外部化の関係<sup>4</sup>

被説明変数は、NFRJで継続して使われてきた家事関連項目のうち、1) 洗濯、2) そうじ(部屋、風呂、トイレなど)、3) 食事の用意、4) 食事の後片付けのそれぞれについて、「ほぼ毎日(週6~7日)」を7点、「一週間に4~5回」を5点、「一週間に2~3回」を3点、「週に一回くらい」を1点、「ほとんど行わない」を0点と換算し、夫と妻それぞれの家事頻度スケールを作成した。これら各項目を被説明変数として、課題1にて作成したそれぞれの家事に対応する家事外部化尺度を説明変数とする。組み合わせは1) 洗濯/クリーニングサービスの利用、2) 掃除/清掃サービスの利用、3) 食事の用意/食の外部化、4) 食事の後片付け/食の外部化とし、Tobit分析を用いて推定を行った。

Tobit分析を用いたのは、約半数から6割の夫がこれらの家事項目を「まったくしない」と回答しており、家事頻度スケールが0で切断された分布をとっているためである。このような切断された分布をとる変数は通常の回帰分析ではなくTobit回帰分析を用いることが適当である(Maddala, 1983; Tobin 1958)。説明変数は課題1にて定義した家事外部化項目を、統制変数は同じく課題1にて使用した変数を用いた。

## 4. 分析結果

### 4.1 記述統計

表1は、変数の記述統計をまとめたものである。

<sup>2</sup> 休職中の場合は「無職」と分類している。家事外部化のニーズを調査時点で特定するためである。

<sup>3</sup> 別の分析で年収の各カテゴリーの中央値を用いて推定したがほぼ同じ結果が得られている。

<sup>4</sup> 家事外部化と家事頻度の間には逆の因果関係も考えられ(Craig and Baxter 2016)、その場合には欠落変数バイアスが生じることになる。ここで具体的に問題となるは家事外部化と家事頻度の双方を媒介する変数だが、この問題については、本研究の二つの課題で分析モデルに共通して投入するとともに、「誰が家事を外部化しているか」という課題1にて代替的に検討する。

まず、課題1の被説明変数である家事外部化に関する数値だが、ここではそれぞれ「よくある」と「時々ある」を合わせたものを<利用率>として紹介する。クリーニングサービスは半数近く、食の外部化は35%近くが利用しているのに対し、清掃サービスの利用は2%とごく僅かである。これらの数値を直接比較できる調査は少ないが、野村総合研究所(2018)の調査で報告されている家事支援サービス利用率1.8%と近似する。

6歳未満の子どもがいる世帯は15%、暮らしぶりに余裕があると答えた世帯は約半数である。夫と妻の労働時間を比べると、14%のカップルで妻の方が長かった。働き方の世帯類型は、夫のみが働いている夫婦は約4分の1、圧倒的多数(59.4%)は調査時点で夫婦とも働いている。妻のみが働いているカップルは5%と少ない。両方無職も1割近くいるがそのほとんどは夫も妻も定年後とみられる高齢者である。学歴水準は夫と妻で差が見られ、夫では大卒以上が半数近くなのに対し、大卒以上の妻は男性の半分の2割に満たない。

課題2の被説明変数である家事頻度スケールを見ると、2019年の調査時点でも夫と妻の家事遂行量には圧倒的な差がみられる。6割の夫が洗濯と食事の用意を、半数の夫が掃除と食事の後片付けを「まったくしない」と答えているのに対し、洗濯を「毎日する」妻は約7割、食事の用意や後片付けも8割の妻が「毎日する」と答えている。平均値で見ると夫の家事量は一週間に一度するかしないか程度であるのに対し、妻の方はほぼ毎日行っている。

表1 記述統計

変数名	N	平均値 (%)	標準偏差	最小値	最大値
家事外部化(「よくある」+「時々ある」)					
クリーニング	2,215	0.49	0.50	0	1
清掃サービス	2,209	0.02	0.14	0	1
食の外部化	2,209	0.35	0.48	0	1
家事頻度スケール					
洗濯頻度(夫)	2,144	1.05	2.03	0	7
掃除頻度(夫)	2,163	1.28	1.98	0	7
食事の用意頻度(夫)	2,155	1.08	2.04	0	7
食事の後片付け頻度(夫)	2,172	1.85	2.49	0	7
洗濯頻度(妻)	2,181	5.97	1.93	0	7
掃除頻度(妻)	2,183	4.97	2.35	0	7
食事の用意頻度(妻)	2,186	6.46	1.50	0	7
食事の後片付け頻度(妻)	2,177	6.37	1.56	0	7



6歳未満の子どもあり	2,242	0.15	0.36	0	1
暮らしぶり余裕あり	2,180	0.52	0.50	0	1
労働時間 妻>夫	2,242	0.14	0.35	0	1
働き方世帯類型					
夫片働き	2,242	0.26	0.44	0	1
妻片働き	2,242	0.05	0.22	0	1
共働き	2,242	0.59	0.49	0	1
両方無職	2,242	0.10	0.30	0	1
夫の学歴					
高校以下	2,242	0.44	0.50	0	1
短大・高専・専門	2,242	0.15	0.36	0	1
大卒以上	2,242	0.40	0.49	0	1
妻の学歴					
高校以下	2,242	0.45	0.50	0	1
短大・高専・専門	2,242	0.36	0.48	0	1
大卒以上	2,242	0.18	0.38	0	1
夫の年齢層					
34歳未満	2,242	0.07	0.25	0	1
35-44歳	2,242	0.19	0.39	0	1
45-54歳	2,242	0.25	0.44	0	1
55-64歳	2,242	0.22	0.41	0	1
65歳以上	2,242	0.27	0.44	0	1

#### 4.2 課題1 家事外部化サービス利用の規定要因

表2から表4はそれぞれクリーニング、清掃サービス、食の外部化サービス利用の規定要因を推計した順序ロジスティック回帰分析の結果である。

まず、クリーニングについて、利用するのは夫が大卒以上、高齢者、暮らしむきに余裕のある世帯である。逆に夫婦とも無職（定年退職後の高齢者夫婦）は夫が片働き世帯に比べてクリーニングを利用していない。ドライクリーニングマークの衣類を家庭で洗濯できるという洗剤が普及したことや、洗濯機の「ドライ洗い」機能による高機能化、またノーアイロンのワイシャツなど繊維素材の高機能化によってクリーニングサービスの需要が低下していると思われるが、NFRJ18で問われた「衣類をクリーニングに出すこと」を現実的に利用する場面は、季節毎のコート類等のクリーニングに加えて「男性ホワイトカラー労働者のワイシャツ」をクリーニングに出す様子が見えてくる。

清掃サービスの利用については、利用する世帯は2%とごく少数派であることも相まって、夫の学歴が比較的高学歴な層と働き盛りと思われる55-64歳の年齢層以外に有意に達した変数はない。

食の外部化に関しては、共働きや暮らし向きに余裕のある世帯が利用している一方、中高年層は若年層（基準カテゴリーの34歳未満）に比べて利用しない傾向が見られる。

いずれの家事外部化項目においても、6歳未満の子どもの存在や妻が夫よりも長時間労働していることは有意な差をもたらしていない。

表 2 クリーニングサービス利用の規定要因 順序ロジスティック回帰分析の推定結果

クリーニングサービス	Coef.	Std.Err.	
夫の学歴			
短大・高専・専門	0.058	0.124	
大卒以上	0.526	0.102	***
妻の学歴			
短大・高専・専門	-0.051	0.098	
大卒以上	0.186	0.133	
夫の年齢層			
35-44 歳	0.067	0.185	
45-54 歳	0.700	0.199	***
55-64 歳	0.859	0.208	***
65 歳以上	0.775	0.219	***
働き方世帯類型			
妻片働き	-0.245	0.206	
共働き	0.103	0.105	
両方無職	-0.419	0.169	*
6歳未満の子どもあり	0.014	0.145	
暮らし向き余裕有り	0.459	0.084	***
労働時間 妻>夫	-0.021	0.121	
Log Likelihood	-2434.67		
LR chi2(14)	150.9	***	
有効ケース数	2,144		

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\*p<0.001

表 3 清掃サービス利用の規定要因 順序ロジスティック回帰分析の推定結果

清掃サービス		Coef.	Std.Err.	
夫の学歴	短大・高専・専門	0.419	0.208	*
	大卒以上	0.355	0.172	*
妻の学歴	短大・高専・専門	-0.005	0.167	
	大卒以上	0.243	0.214	
夫の年齢層	35-44 歳	0.090	0.382	
	45-54 歳	0.238	0.392	
	55-64 歳	0.782	0.395	*
	65 歳以上	0.800	0.410	
働き方世帯類型	妻片働き	-0.389	0.369	
	共働き	0.320	0.178	
	両方無職	-0.033	0.271	
6 歳未満の子どもあり		-0.477	0.291	
暮らし向き余裕有り		0.198	0.140	
労働時間 妻 > 夫		-0.293	0.203	
Log Likelihood		-880.698		
LR chi2(14)		44.570	***	
有効ケース数		2,138		

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\*p<0.001

表 4 食の外部化の規定要因 順序ロジスティック回帰分析の推定結果

夕食の外部化	Coef.	Std.Err.	
夫の学歴			
短大・高専・専門	0.172	0.122	
大卒以上	0.077	0.099	
妻の学歴			
短大・高専・専門	0.030	0.097	
大卒以上	0.065	0.129	
夫の年齢層			
35-44 歳	-0.241	0.185	
45-54 歳	-0.663	0.197	**
55-64 歳	-0.511	0.205	*
65 歳以上	-0.954	0.216	***
働き方世帯類型			
妻片働き	0.136	0.198	
共働き	0.246	0.103	*
両方無職	0.067	0.166	
6 歳未満の子どもあり	-0.076	0.142	
暮らし向き余裕有り	0.165	0.082	*
労働時間 妻 > 夫	0.213	0.120	
Log Likelihood	-2517.858		
LR chi2(14)	83.120	***	
有効ケース数	2,139		

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\*p<0.001

### 4.3 課題2 夫と妻の家事頻度に対する外部化効果

表5から表8は、夫と妻の家事頻度（洗濯、掃除、食事の用意、食事の後片付け）に対する家事外部化効果のTobit回帰分析の推定結果をそれぞれまとめたものである。それぞれの項目について夫婦の家事分担の規定要因として一般的に使用される変数の効果を確認した上で、外部化サービスの利用の効果を見ていくことにする<sup>5</sup>。

まず洗濯について、妻のみが働く妻片働き世帯と両方無職の世帯においては夫の洗濯頻度が高く妻の洗濯頻度が低い傾向がみられる。両方無職の世帯の大多数はリタイア後のカップルであるが、そうした世帯においては夫が妻に代わって洗濯をするという傾向があると思われる。また、妻が夫よりも長時間働いている場合、妻の洗濯頻度は有意に低い。その逆に年齢が高い世帯では妻の洗濯頻度が高く夫の洗濯頻度が低いという結果である。これら変数を統制した上で、クリーニングサービスの利用は夫の洗濯頻度とマイナスの関係にある。NFRJの調査がコロナ禍前に行われたことを鑑みれば、サラリーマンがワイシャツを自宅で洗う代わりにクリーニングを利用しているからではないかと推測される。一方、クリーニングの利用は妻の洗濯頻度に対して有意な影響を及ぼしていない。

掃除も洗濯と同様に、妻のみが働く世帯と妻が長時間労働の世帯では妻ではマイナス、夫ではプラスで有意な効果が見られることから、妻の就労にともなう時間制約により夫が掃除をしていることが示唆される。また主にリタイア後の両方無職の世帯にも同様の傾向が見られる。6歳未満の子どもがいる世帯では夫も妻も掃除の頻度が高い。これらを統制した上で清掃サービスの利用は夫と妻ともに掃除の頻度に影響を与えていない。

食事の用意と後片付けでも同様に、妻片働きの世帯や夫の時間制約が少ないとみられる両方無職の世帯、妻の労働時間が夫よりも長い世帯で、妻にはマイナス、夫ではプラスの効果が見られる。その一方で、夫の年齢層が高い世帯では、妻は食事の用意も後片付けも高い頻度で行っている。これらを統制した上で、NFRJ18の設問「平日の夕食を家族の誰も調理しないこと」という夕食の外部化の効果は、妻においては食事の用意、後片付けの両方に対してマイナスな効果をおよぼしている。その一方で、夫が食事の用意をすることに対してプラスに有意に働いている。つまり、夕食の外部化が夫の食事を用意する頻度を上げているという結果である。外食、市販の弁当や即席食品をよく利用する世帯ほど、夫が高い頻度で「食事の用意をしている」という、一見矛盾する結果は、別に行ったクロス集計や一元配置分散分析でも確認された。その結果の解釈については次章で考察したい。

---

<sup>5</sup> 学歴水準は夫婦間での相関が強いため多重共線性が否定できない。この点を確認するために夫の学歴のみを統制したモデルで推定を行ったが結果には大きな違いは見られなかった。本論では両者を用いた推定結果を報告する。

表 5 夫と妻の洗濯頻度に対するクリーニングサービス利用の効果  
Tobit 回帰分析の推定結果

	洗濯頻度 (夫)			洗濯頻度 (妻)		
	Coef.	Std. Err.		Coef.	Std. Err.	
クリーニングサービスの利用	-0.458	0.163	**	0.043	0.055	
夫の学歴						
短大・高専・専門	0.377	0.386		-0.532	0.129	***
大卒以上	0.420	0.315		-0.312	0.105	**
妻の学歴						
短大・高専・専門	-0.226	0.308		0.208	0.102	*
大卒以上	0.825	0.394	*	-0.169	0.136	
夫の年齢層						
35-44 歳	-0.319	0.531		0.307	0.193	
45-54 歳	-1.018	0.574		0.676	0.206	**
55-64 歳	-1.532	0.608	*	0.659	0.215	**
65 歳以上	-1.681	0.639	**	0.421	0.224	
働き方世帯類型						
妻片働き	3.239	0.624	***	-1.032	0.215	***
共働き	1.112	0.335	**	-0.169	0.108	
両方無職	1.459	0.555	**	-0.772	0.176	***
6 歳未満の子どもあり	0.645	0.419		0.351	0.150	*
労働時間 妻 > 夫	1.496	0.354	***	-0.710	0.124	***
定数項	-1.658	0.708		5.793	0.246	
Log Likelihood	-2684			-4438		
LR chi2(16)	111.55	***		119.21	***	
有効ケース数	2,110			2,147		

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\*p<0.001

表 6 夫と妻の掃除頻度に対する清掃サービス利用の効果  
Tobit 回帰分析の推定結果

	掃除頻度 (夫)		掃除頻度 (妻)			
	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.		
清掃サービスの利用	-0.234	0.208	-0.177	0.127		
夫の学歴						
短大・高専・専門	0.398	0.252	-0.421	0.157	**	
大卒以上	0.188	0.204	-0.281	0.127	*	
妻の学歴						
短大・高専・専門	-0.210	0.200	0.167	0.123		
大卒以上	0.347	0.259	-0.472	0.165	**	
夫の年齢層						
35-44 歳	0.085	0.358	-0.099	0.232		
45-54 歳	-0.376	0.386	0.376	0.247		
55-64 歳	-0.355	0.405	0.207	0.258		
65 歳以上	-0.418	0.426	0.443	0.269		
働き方世帯特性						
妻片働き	2.273	0.409	***	-1.637	0.263	***
共働き	0.391	0.215		-0.561	0.130	***
両方無職	1.843	0.343	***	-0.868	0.211	***
6 歳未満の子どもあり	1.010	0.283	***	0.374	0.181	*
労働時間 妻>夫	0.867	0.238	***	-0.994	0.150	***
定数項	-0.606	0.473		5.690	0.294	***
Log Likelihood	-3397		-4803			
LR chi2(16)	96.65	***	155.49	***		
有効ケース数	2,121		2,142			

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\*p<0.001

表 7 夫と妻の食事用意頻度に対する夕食外部化利用の効果

Tobit 回帰分析の推定結果

	食事の用意 (夫)			食事の用意 (妻)		
	Coef.	Std. Err.		Coef.	Std. Err.	
夕食の外部化	0.510	0.142	***	-0.235	0.039	***
夫の学歴						
短大・高専・専門	0.727	0.359	*	-0.196	0.099	*
大卒以上	0.064	0.296		0.020	0.080	
妻の学歴						
短大・高専・専門	0.040	0.289		0.000	0.078	
大卒以上	0.919	0.377	*	-0.120	0.104	
夫の年齢層						
35-44 歳	-0.917	0.526		0.248	0.148	
45-54 歳	-0.625	0.554		0.392	0.158	*
55-64 歳	-1.016	0.580		0.492	0.164	**
65 歳以上	-0.765	0.608		0.614	0.171	***
働き方世帯特性						
妻片働き	3.122	0.574	***	-0.978	0.164	***
共働き	0.220	0.312		-0.016	0.083	
両方無職	1.974	0.487	***	-0.410	0.134	**
6 歳未満の子どもあり	-0.671	0.420		0.357	0.115	**
労働時間 妻>夫	1.277	0.339	***	-0.505	0.096	***
定数項	-3.073	0.691	***	6.697	0.188	***
Log Likelihood	-2811			-3903		
LR chi2(16)	89.16	***		127.45	***	
有効ケース数	2,113			2,144		

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\*p<0.001



表 8 夫と妻の食事後片付け頻度に対する夕食外部化利用の効果

Tobit 回帰分析の推定結果

	食事の後片付け (夫)			食事の後片付け (妻)		
	Coef.	Std. Err.		Coef.	Std. Err.	
夕食の外部化	0.117	0.122		-0.218	0.041	***
夫の学歴						
短大・高専・専門	0.686	0.311	*	-0.213	0.104	*
大卒以上	0.643	0.252	*	-0.124	0.084	
妻の学歴						
短大・高専・専門	-0.214	0.247		0.196	0.082	*
大卒以上	0.784	0.319	*	-0.246	0.109	*
夫の年齢層						
35-44 歳	-0.639	0.442		0.379	0.155	*
45-54 歳	-1.072	0.472	*	0.556	0.165	**
55-64 歳	-1.042	0.495	*	0.681	0.171	***
65 歳以上	-0.926	0.521		0.742	0.179	***
働き方世帯類型						
妻片働き	2.539	0.510	***	-0.834	0.172	***
共働き	0.835	0.263	**	-0.108	0.087	
両方無職	1.504	0.426	***	-0.478	0.140	**
6 歳未満の子どもあり	0.668	0.346		0.191	0.120	
労働時間 妻 > 夫	0.686	0.293	*	-0.443	0.100	***
定数項	-0.650	0.581		6.506	0.197	***
Log Likelihood	-3771			-3973		
LR chi2(16)	89.75	***		128.89	***	
有効ケース数	2,129			2,136		

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\*p<0.001

## 5. 結論と考察

以上、家事外部化サービス利用の規定要因と家事頻度に対する影響についての分析結果を述べた。それでは、無償労働としての家事は市場サービスとどう連動しているのかという、本研究の出発点となった問いに立ち戻って整理してみよう。

まず、本研究で明らかになったのは、一言で「家事の外部化」といっても、その内実は様々であるということである。NFRJ18の調査票の設計にあたり、〈洗濯〉に対するクリーニングサービスの利用、〈掃除〉に対する清掃サービスの利用、〈食事の用意〉や〈後片付け〉に対する外食・出前・市販の弁当・即席食品の利用が、それぞれの家事を代替するものだと想定していた。しかし、それぞれの関係は想定していたほど単純なものではないようだ。

まずクリーニングについて、家の洗濯物すべてをクリーニングに出せば私たちは洗濯から解放されるのだろうか。洗濯機が普及した現代で、クリーニングが洗濯を代替すると考えるのは現実的ではない。クリーニングは家事としての洗濯を代替するのではなく、家庭の洗濯機や手洗いでは対応できない素材、たとえば絹やウールのコート類、あるいは糊付けやアイロンの手間がかかるワイシャツ類の洗浄を専門の業者に任せることだろう。分析から明らかになったのは、クリーニングサービスを最も頻繁に利用しているのは夫の学歴が高く、中高年で、比較的暮らしに余裕のある世帯である。その逆に利用頻度が低いのはリタイア後の夫婦両方が無職の世帯であった。NFRJ18が実施されたのがコロナ禍の前だったということを鑑みれば、クリーニングを利用していたのはホワイトカラーの世帯で通勤服の洗濯のためと推測される。また、共働きであることや妻の労働時間が長いこともクリーニング利用に影響を及ぼしていないことから、クリーニングが洗濯を代替するものと考えするには無理がある。

清掃サービスについても、利用する世帯は夫の学歴が高いことと、比較的高齢層という以外に分析に投入した変数で有意にはたらくものはなく、その利用には夫、妻ともに掃除の頻度を下げる効果はみられない。ダスキンやお掃除本舗などが家事代行サービスとして売り出す清掃サービスを年末の大掃除の際にスポットで利用することはあるかもしれないが、これも日常の掃除を代替するものではないだろう。

一方、平日の夕食を家族の誰も調理しないで市販の弁当や外食で済ませることは、若年層や共働き世帯で多く見られる。暮らしに余裕のある世帯でも食の外部化は進んでいると思われる。家事頻度への影響については、妻がする食事の用意、後片付けについてマイナスの効果が確認された。夕食の外部化は「食」に関する妻の家事負担を軽減していると考えてよい。

その一方で、夕食の外部化は夫が食事の用意をする頻度に対してプラスの相関を示していた。そもそも、この設問で「平日の夕食を家族の誰も調理しないこと」という記載には「外食、出前、市販の弁当、即席食品で済ませること」という但し書きをつけており、調査設問のワーディングとしては食事の用意を「しない」と同義である。しかし、夫に

についてはこうした夕食の外部化が食事の用意を「する」傾向を高めるという効果が見られるのである。この一見矛盾する結果をどう解釈すればよいのだろうか。

一つには、「食事の用意」と「調理」の意味に夫と妻で認識のずれがあると考えられることができる。妻にとって「食事の用意」とは、メニューを考え、調達した食材を調理し、食器を並べて配膳するまでの一連の作業を意味しているかもしれない。ところが、夫にとっての「食事の用意」は必ずしも「調理」という過程がなくても成立するものだとすればどうだろう。あくまで推測ではあるが、夫にとって、市販の弁当や出前の料理をテーブルに並べることをも十分「食事を用意」したことになっている可能性がある。この点については参与観察を含む質的調査による詳細なデータが必要となるだろう。

本研究の分析結果から浮かび上がる「食」をめぐる日本の家族の姿から、あらためて日本の家事事情を考えさせられる。日本人の家事時間は世界的にみて非常に短いことが知られており、1970年代ですでに先進諸国で最低のレベルだった（品田 2007）。最新のOECD データで見ても、日本人が無償労働に費やす時間は女性で一日平均 224.3 分、OECD 加盟諸国中、女性で下から 5 番目で OECD の平均値 263.4 分を大きく下回る。ちなみに、男性は 40.8 分で、二位の韓国を大きく引き離して堂々の最下位である（OECD 2021）。その一方で、有償労働と無償労働を合わせた総労働時間は、女性が 495.8 分、男性が 492.6 分、男女ともに OECD 加盟諸国の平均値を大きく上回っている。実際問題として、日本の女性はこれ以上働きようがないほど働いているのである。

世界的にみて、すでに短い日本女性の家事時間を「外部化」によってさらに減少させようとするのは現実的ではない。日本の家族は一家で食卓を囲む時間がないほど忙しい生活をしている（品田 2019）。女性の活躍を推進するために家事外部化を進めようという政策はこうした家族の現実を誤認していると考えざるをえない。家事と仕事をめぐる家族の実態について、今後家族社会学内外でさらに議論を深めていく必要がある。

## 参考文献

- Bianchi, S. M., M. A. Milkie, L. C. Sayer and J. P. Robinson, 2000, "Is anyone doing the housework? Trends in the gender division of household labor." *Social Forces* 79(1): 191-228.
- Craig, L., and J. Baxter, 2016, "Domestic Outsourcing, Housework Shares and Subjective Time Pressure: Gender Differences in the Correlates of Hiring Help." *Social Indicators Research* 125 (1):271-288. doi: 10.1007/s11205-014-0833-1.
- De Ruijter, E, 2004, "Trends in the outsourcing of domestic work and childcare in The Netherlands - Compositional or behavioral change?" *Acta Sociologica* 47 (3): 219-234.
- Estévez-Abe, M., 2015, "The Outsourcing of House Cleaning and Low Skill Immigrant Workers," *Social Politics: International Studies in Gender, State & Society*, 22(2):147-69.
- 長谷部杏子・草苺仁, 2007, 「調理技術と食の外部化」 神戸大学農業経済 39: 37-42.

- Hirao, K. 2019. "Families and SDGs 5: Parental Leave Policies and Gender Equality " E. D. Dominic Richardson, Daryl Higgins, Keiko Hirao, Despina Karamperidou, Zitha Mokomane, Mihaela Robila ed., *Families, Family Policy and the Sustainable Development Goals*. Florence: UNICEF Office of Research – Innocenti.175-207.
- Hook, J. L., 2006, "Care in Context: Men's Unpaid Work in 20 Countries, 1965–2003." *American Sociological Review*, 71(4): 639-660.
- Killewald, A., 2011, "Opting Out and Buying Out: Wives' Earnings and Housework Time," *Journal of Marriage and Family*, 73(2):459-71.
- Maddala, G. S., 1983, *Limited-dependent and qualitative variables in econometrics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 松田茂・鈴木征, 2001, 「夫婦の労働時間と家事時間の関係」『家族社会学研究』13(2):73-84.
- 内閣府, 2014, 『日本再興戦略 改訂2014—未来への挑戦—』  
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/honbun2JP.pdf>.
- , 2020, 『日本経済2019-2020—人口減少時代の持続的な成長に向けて』  
[https://www5.cao.go.jp/keizai3/2019/0207nk/pdf/n19\\_hajime.pdf](https://www5.cao.go.jp/keizai3/2019/0207nk/pdf/n19_hajime.pdf).
- 永井恵子, 2016, 「我が国の家事外部化の動向を探る——家計調査結果から見た「家事に関する支出」」『家計経済研究』(109):75-89.
- 日本フードサービス協会, 2009, 『外食率と食の外部化率の推移』  
[http://www.jfnet.or.jp/data/h/data\\_c\\_o09\\_2009.html](http://www.jfnet.or.jp/data/h/data_c_o09_2009.html).
- 野村総合研究所, 2018, 「平成29年度 商取引適正化・製品安全に係る事業（家事支援サービス業を取り巻く諸課題に係る調査研究）調査報告書」野村総合研究所.
- 農業・食品産業技術総合研究機構編, 2006, 『農業技術辞典』農山漁村文化協会.
- 農研機構, 2020, 『農業技術辞典』 <http://lib.ruralnet.or.jp/nrpd/#koumoku=12507>.
- 農林水産省, 2015, 『平成26年度 食料・農業・農村白書』  
[https://www.maff.go.jp/j/wpaper/w\\_maff/h26/zenbun.html](https://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/h26/zenbun.html).
- OECD, 2021, *OECD STATS* “Employment: Time Spent in Paid and Unpaid Work, by Sex.”  
[https://stats.oecd.org/index.aspx?r=697920&errorCode=403&lastaction=login\\_submit#](https://stats.oecd.org/index.aspx?r=697920&errorCode=403&lastaction=login_submit#).
- Shelton, B. A. and D. John, 1996, “The Division of Household Labor,” *Annual Review of Sociology*, 22: 285-92.
- 品田知美, 2007, 『家事と家族の日常生活』学文社.
- , 2019, 「家族との食事時間——子どものいる夫妻の生活時間調査から」『駒澤社会学研究』(53):17-41.
- Shire, Karen A., Rainer Schnell, and Marcel Noack. 2017, “Determinants of Outsourcing Domestic Labour in Conservative Welfare States: Resources and Market Dynamics in Germany.” Working Paper 2017–04. Duisburger Beiträge zur soziologischen Forschung.  
<https://doi.org/10.6104/DBsF-2017-04>.

総務省統計局, 2017, 「平成 28 年社会生活基本調査——生活時間に関する結果」総務省統計局 <https://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/kekka.html>.

Tobin, J., 1958, "Estimation of Relationships for Limited Dependent Variables." *Econometrica* 26:24-36.

Van der Lippe, T., Tijdens, K. and De Ruijter, E., 2004, "Outsourcing of domestic tasks and time-saving effects," *Journal of Family Issues*, 25(2):216-40.

湯浅安由里, 2005, 「女性の収入増加と家事外部化に関する実証分析」『国際公共政策研究』9(2):333-47.

# **Outsourcing of Domestic Labor: Determinants and Effects on Couples' Frequencies of Domestic Work**

**Keiko Hirao**

**Sophia University, Graduate School of Global Environmental Studies**

## **Abstract**

The most significant change in the share of domestic works among married couples in the world during the last half-century has been the decrease of time that wives spent in domestic labor. This decrease in women's unpaid work has often been explained by the increase in their labor supply and by "outsourcing" of household labor. Few studies in Japan, however, have directly examined the relationship among the outsourcing of housework, the decrease in women's time spent in unpaid work, and the degree of their labor supply. This study examines the determinants of outsourcing and its effect on couples' frequencies of domestic work by using the data collected in the NFRJ18 on the frequencies of using market services on 1) laundromat, 2) house cleaning, and 3) cooking (no family member cooks for dinner on weekdays). The results revealed that laundromat and house cleaning services are not substituting the work women do on doing laundry or cleaning house. Purchasing prepared food and dining out showed a significant effect on decreasing the frequencies of wives fixing food and dishes. On the other hand, husbands who purchase prepared food and dine out more often were found to be more involved in preparing food. This seemingly contradicting result may indicate the differences in the perceptions between couples on what it means to "prepare food" and "cooking for the family."

**Key Words:** Domestic work, Outsourcing, Division of Labor, Gender,